

# 巻 頭 言

元日本数学会理事長・監事 東京工業大学名誉教授

小島 定吉

本誌の巻頭言を書くのは初めてかと思い調べたところ、19年前の第10巻第1号に新理事長として拙文を執筆していました。昨年5月末に監事職を辞したのを機会に執筆依頼があり、久々に寄稿させていただきます。ちなみに私が数学会の役員であったのは、理事として2005年から4年間、および監事として2010年から13年間で、足掛け20年のその変遷に関する私感を記したいと思いますが、話が多少カビ臭くなるのはご容赦ください。

まず、数学会といえども時代の流れとは無縁でなく、この20年弱にもいろいろなことに翻弄され、しかしながら歴代の理事会は各機会に力強く対応し、最近流行りのダイバシティとインクルージョン、さらにエクイティーをしっかりと確保した法人としての活動を進めています。組織としての変化は、2012年の一般社団法人化が大きかったと感じます。内閣府主導の公益法人の見直しを契機に、所轄官庁が文科省から内閣府に代わり、定款の策定などなかなか先の見えない変革を、当時の理事会は3年をかけて準備し新制法人化を軟着陸させ、会員に対するその説明責任を果たしました。また、それにしたがって監事の役割も変化してきました。新制法人化前は監事の仕事は数学会の業務および会計の監査を年1回行うだけでしたが、新制法人化後は監事は投票権のないオブザーバとして月1回開催される理事会に出席することになりました。決まりはないのですが、監事は少なくともこの20年間は全員理事長経験者で、次第に理事会の場で意見を求められるようになり、最近では過去の経験に基づき自ら意見を述べる機会も増えてきたように感じます。

一方、新制法人化した際に内閣府から当時5億円程度あった公益目的用資産を10年間で消化することが求められ、その後の学会運営に大きく影響を与えました。事業計画や予算決算の精密化および透明化が必要になり、弁護士、公認会計士と顧問契約を交わし、会計システムを収支ベースから損益ベースに移行し、会計監査に万全を期しました。さらに、年間5千万円程度の公益目的支出が求められたことにより、事業拡大を強いられる場面が生まれました。収益の拡大を目指す一般企業では新たな事業展開は結構な話ですが、収入源が主に会員収入に限られる数学会では必ずしもそうは行きません。理事会は可能な限り効率のかつ合理的な事業拡大を模索し、幸い内閣府から指示されたノルマを計画通り2021年度に達成しました。現在は10年前の公益目的支出規模を念頭に、支出抑制に様々な工夫を凝らしています。

こうした流れと無関係ではありませんが、数学会は数学界を含む社会との接点が飛躍的に増えたように感じます。2005年の一つの課題はジャーナルの電子化でした。その後、情報システム運用委員会ができ、各種情報がHPで広く一般に公開、学会プログラム作成のオンライン化など、数学会業務全般の電子化は、コンピュータ環境の進展にほぼ同期して進められています。2008年にはMSJ-IRIの後継としてMSJ-SIが始まり、国際交流を力強く支援しています。男女共同参画社会推進委員会の取り組みの進展は、ホームページの「男女共同参画社会推進への取り組み」をご覧くださいと、2004年の保育室の設置から始まったその活躍の場が如何に広がっているかを見て取れます。また、日本応用数理学会や統計関連学会連合との連携も異分野・異業種研究交流会の活動を通してますます深まっています。もちろん学会員個人による学問上の重要な貢献も枚挙にいとまがありませんが、社会との接点という意味では、この期間に国際数学連合(IMU)総裁二人、また国際学術会議(ISC)会長を輩出したことは日本の数学の確固とした存在感を世界に示す大きなニュースでした。

例えば、2005年に文科省の科学技術政策研究所(NISTEP)が開催したワークショップで、当時の科学技術政策局長から「数学者出てこい！」と言われ、後に数学が行政から「忘れられた科学」と指摘されたときからずいぶん変わりました。数学会は年会などの学術的会合を開催し、ジャーナルなどの学術誌の出版に専念していれば事足りると考えていた時代から、その活動に社会的要請にも応じる方向性が生まれてきました。内なる期待に応えることはもちろんですが、外からの期待に耳を傾け、数学会の将来を見据える上での一つの要素として取り込んできました。一言で言うと、数学会は主に日本に在住する数学者だけのための組織だった時代から、この20年間で、外に情報を発信する透明性の高い組織に育ってきたのだと思います。

現在の財政状況を考えると多少の事業縮小は必要ですが、この20年間で数学会は社会からの様々な期待を咀嚼し、多くの学会員の活躍により期待に応える実績を上げ、知恵を蓄積してきたことを振り返ると、将来が明るく見えるような気がします。日本数学会は、我が国の数学コミュニティの国内外でのプレゼンスを高める活動を支援し、かつリードし、より発展させることを目指して、さらに開かれた組織になることを期待しています。